

栄養障害からの心血管障害が認知症合併透析患者の 生命予後を悪化させる

長崎腎病院

○高木志緒理 青柳真生 下田美智子 山中真樹子 丸山祐子 宮崎健一
李 嘉明 船越 哲 原田孝司

【目的】

当院における認知症透析患者の入院状況、生命予後および死亡原因の特徴を検討する。

【対象と方法】

2007年に認知症評価を行った外来透析患者のうち、2012年末まで経過が判明している32名を、認知症群10名と非認知症群22名の2群に分け、入院回数・入院原因・5年生存率・死亡原因を比較検討する。

【結果】

認知症群と非認知症群で、年齢・アルブミン・nPCR・EF・Hbなどの項目、また平均入院回数(5.90回/人:3.95回/人、 $P=0.15$)、3大死因入院割合(21.5%:25.0%、 $P=0.62$)に有意差はなかった。摂食障害入院割合(4.6%:0%、 $P<0.05$)、社会的入院割合(21.5%:0%、 $P<0.005$)、死亡患者中の心血管障害死割合(66.7%:12.5%、 $P<0.05$)は認知症群で有意に高頻度であった。5年生存率(10.0%:63.6%、 $P<0.005$)は非認知群が有意に良好であった。

【考察】

認知症は透析患者において、感染症や心血管障害と独立した危険因子である可能性があり、その早期発見と治療は重要と考えられる。